

○インターネット

- インターネットが発達したことで、より一層ゲイコミュニティの大きさを感じられるようになったし、色んな人と知り合えるようになったのは嬉しいし、役に立っていると思う。
- インターネットによって同じゲイの人と話したり、会ってつきあったりできるようになり、日常的にも精神的にも楽になった。
- 田舎に住んでいると、なおさら恋愛の相手やゲイの友達との出会いの機会が少なくなってしまうので、インターネットの存在はとても大きい。
- 共通の価値観の友人やゲイの友人が見つかりにくい環境に住んでいるので、ネットを通じて「隠れゲイ」の人たちをもっと積極的に行動できるチャンスが増えたらいい。
- HIVの問題は深刻だと思う。インターネットが普及し、不特定の相手に出会いやすくなったのが大きく影響している。
- インターネットは個人が自分に必要な情報を自分の判断で取り出して活用できる反面、判断力の十分でない個人にも同時に配信されているのは恐ろしい。
- ネットだけに出会いを求める人は、直接人と会って知り合うことを考えずに、セックスだけの相手を求めている人が多いようだ。

考察

インターネットは、ゲイ・バイセクシュアル男性が仲間と出会い、活動や交流の場を獲得して社会的孤立から解放されることを可能にしました。しかしその一方で、インターネットの普及が、性的な出会いを容易にし、性衝動を駆り立て、性的な刺激や快感への没入傾向を強めている可能性も自由記述の中で指摘されています。これはゲイ・バイセクシュアル男性に限らず、社会全般に認められる傾向ではありますが、日常生活において出会いの手段や機会が限られているゲイ・バイセクシュアル男性にとっては、出会いのきっかけをインターネットに頼る人の割合はより大きいかもしれません。彼らはインターネットの恩恵を受けると同時に、多種多様なリスクにもさらされていると言えるでしょう。

インターネットは、その利便性(距離を問わずに人とのつながりが生まれること、匿名性が保たれやすいこと、情報が得やすいことなど)をうまく活用することで、コミュニティへの帰属意識の低い人やコミュニティを避けている人、あるいはコミュニティベースのメッセージが届きにくい地方在住の人などに対する予防介入の重要なツールになる可能性を秘めています。また、今回の調査から、必ずしも同じ性的指向ではないかもしれない研究実施者と研究参加者との間にも、インターネットを通じてコミュニケーションできる関係や協力体制を生み出すことができるのではないかと、思われました。

○ 教育に願うこと

- 小、中、高校の性教育で同性愛についてきちんと扱うべきだと思う。それが孤独感を感じている若いゲイの救いになるかもしれない。
- 男の子と女の子が恋愛をするのが当たり前、という教育のあり方では、いつまでたっても一般の人からはゲイは宇宙人のような存在のままだと思う。
- 学校に通う時期と思春期とは重なる部分が多い。自分が性的指向を自覚した時に周囲はヘテロの間で溢れており、その環境で生み出された疎外感に今でも苛まれている。
- 人生初期の学校教育から性の多様性を教えることで、マイノリティにとっては社会の抑圧を軽減することになり、より良い人生を進む糸口として機能するだろう。
- 同性に惹かれる存在もあること、そういう指向の人でも人間的価値は同じであることを初中等教育を通じて広めてほしい。
- 教育の場で、同性愛者と異性愛者の学生が自由に交流できるようになってほしいと思う。
- 同性愛に悩みかつて学校で匿名の相談をしたが苦しい体験となった。現在の学校の性教育で同性愛についてカリキュラムに入っていることを願う。

考察

ここには、同性愛や両性愛に対する社会的な理解の促進を学校教育の早い段階から組み入れてほしいという願いと、それだけでなく同性に向かう欲求や関心を自覚し始めた児童や生徒自身のためにも、学校で性の多様性を認める教育があることの大切さが述べられています。学校という社会の中で、自分が持っているかもしれない性的指向を否定や揶揄、嫌悪を受けるものとして認識し始めるのと、多様な在り方のうちのひとつであり人間としての価値差を意味しないこととして認識し始めるのとでは、その後の人生の方向性が大きく異なって来るものと考えられます。同性愛や両性愛への否定的なメッセージを強く受けるほど、疎外感や不安を感じ、しかもそう感じていることすらも隠さなければいけない(つまり感じていない振りをする)という二重のストレスに同時にさらされることになるでしょう。

性にまつわる教育カリキュラムの見直しや改善も求められますが、それ以前に、教育現場にいる大人が、性的指向について周囲との違いに疎外感を持ったり、自分自身でも違和感を持つなどして密かに悩む生徒や児童が今現在身近にもいるのかもしれない、という想像力を持つ必要があるでしょう。そして自分たちの日頃の何気ない言動の中に、異性愛以外の性的指向を否定するようなメッセージが含まれていないか、またそのことがどれほどの影響を与えているのかについて振り返ってみることが望まれます。養護教諭や性教育担当者はもちろん、性教育に直接携わることのない教師であっても、性的指向に関する悩みや葛藤を相談できる窓口となる人が身近にいることも、とても重要なことと思われまます。

○ 将来への不安と法的整備への願い

- 自分の生きやすい環境を努力して作ってきたが、老後についてはかなり不安。特に病院に入院した時のことを考えると寒気がする。
 - 将来老いていって一人で暮らすのは寂しいことだと思う。
 - 同性を愛することに長い間苦しんで来て、ようやくある男性と出会ったが、自分がこれからどうなるのか？どうすればよいのか？いまだ将来が不安。
 - 将来を真剣に考えるのはストレスです。一人で野垂れ死ぬ自分の姿が目には浮かびますから。
 - 同性同士でも結婚できるようにして欲しいし、それが変に思われずに周囲から認められるような社会になってほしい。
 - お付き合いしても同性だと「どうせずっと一緒にいれるわけじゃない」と遊ぶ人が多い。だから同性婚を認める国を羨ましく思う。
 - 良いパートナーがいるが、老後、自分が死ぬ時の財産分与や面会権を考えると、同性婚・DP法^{*}だけは確立してほしい。
 - 社会制度(保険や年金、婚姻など)上でゲイであることにより不利益を被らないで普通に生活したいというゲイの潜在人口は多いと思う。
 - 同性愛者が何年つきあっても制度的に何も守られていない。即ち、国から何も期待されていないということ。社会から期待されていない私達は何を活力源として生きて行けば良いのか？
- *DP法：ドメスティック・パートナー法。一定期間同居する同性愛のカップルに年金や財産相続の権利を認める法律。

考察

男性同士のパートナーシップが法的に守られていないことに関連して、将来の孤独への不安を感じている研究参加者がいました。異性愛者の結婚においては、法的な守りや縛り、周囲からの期待や社会規範、あるいは子どもの存在によって、相手との関係を維持しようとする動機づけが多少なりとも支えられています。しかし、同性のカップルは多くの場合、そのいずれの支えも欠いています。愛情対象となる同性を見つけても、男性同士のカップルへの理解があまり得られない社会の中で、互いの思いや信頼だけを頼りに関係を長く続けていくことは、決して楽ではないと思われます。上記の自由記述からは、そうした関係を結べる相手とめぐりあえたことを喜ぶ人でも、その関係が社会的・法的に保証や認知されていないために、「いつかは別れが来る」「ひとりになってしまう」という将来の孤独への不安、あるいは「自分たちは社会から何の期待もされていない人間なのだ」という感覚を抱え続けていることが窺えます。

また、自由記述からは「一緒にいたい相手でもどうせずっと一緒にはいられない」という諦めや割り切りによって、性的な関係は持っても、その関係を心理的に深めることは最初から避ける場合もあることが窺えました。それは、一般的には「性欲を満たすだけの」「無責任な」関係の持ち方と見なされるかもしれませんが、確かな関係を求めても得られない時の落胆や悲しさを感じなくてすむための、やむなき身の守り方とも考えられます。

男性同士のカップルの関係が法的にきちんと保証されていないことは、実際のカップルが被る現実的な不利益だけでなく、ゲイ・バイセクシュアル男性の将来への希望や、「将来につながる今」をよりよく生きようとする意欲を持ちにくくする、などの眼に見えない心理的な影響を及ぼしている可能性があると思われる。

○ HIVや性感染症の予防

- HIVの検査を受けたいけど、地域の保健所では時間的に不便なので検査が受けにくい。
- HIVの自己検査法がもっと利用しやすくなればいいのではないか。
- ゲイにとって、予防についての情報を得られやすい環境を作る必要があると思う。
- ゲイであることを明らかにしても大丈夫な、予防の方法について相談できたり性感染症の治療が受けられる医療機関が必要だと思う。
- セックスを規制したり純愛を推奨するのではなく、定期的にHIVや性感染症の検査を気軽に受けられ、カウンセリングにつなげられるような体制作りが必要だ。
- HIVについては、「ゲイの病気」とか、「ゲイの撲滅が予防」というようなことを言う人がいて、不愉快だ。
- 異性愛者にも起こる病気なので、HIVについて色んな媒体を使って各々にまずは実情を知ってもらおう努力をすべきだ。
- HIVの検査を受けたほうがいいのかもしいないが、やはり怖い。
- 自分ももしかしたらHIVに感染しているのではないかと不安になることがある。
- もっと多くのゲイが、正確な知識を持って積極的に予防する努力をしてほしい。
- コンドーム使うのが当たり前という風潮になってほしい。
- 本当はセーフセックスがしたくても、なかなか「コンドームを使おう」と言い出せないままセックスが始まってしまうことが多い。
- オーラルセックスではコンドームを使わないのが今は主流だが、オーラルセックスについてもコンドームを使うよう啓発してほしい。
- 感染リスクはゼロでないとわかっていても、フェラチオでコンドームを使うのはちょっと興ざめしてしまうというのが本音だ。
- 彼としかセックスをしないので、コンドームを使わずに、できるだけ性感染症のリスクを低くするにはどうすればいいのかについての情報がほしい。
- 男性同士のセックスは、そういう場所に行けば相手を探すのが結構簡単なので、その性欲を抑えてセックスを控えるような感染予防は難しいと思う。
- 早くHIVの特効薬が開発されたらいいと思うけれど、それが開発されたらみんなもっとセックス三昧になるんだろうなと思うと、怖い気がする。
- 自分はHIV陽性者だが、周りの友達にHIVのことをカムアウトした上で予防を呼びかけても、あまり聞く耳を持ってくれない。
- 知らずにHIV感染者とのセックスをしたが運良く感染しなかった。それからは本当に気をつけようとしている。

- AIDSを減らしたいのなら発展場やハッテンという行為に対して社会的制裁を加えるべきだ。
- 自分はセックスの時必ずコンドームをつけるようにしているが、今まで相手の方から「つけよう」と言われたことはなく、コンドームを持っていた男性に出会ったこともない。
- 多くのゲイの実際の行動はHIV予防を優先させたものにはなっていない。
- 自分は皆にHIVの感染の恐ろしさを話して退かれる。
- ネット上では、予防に対して意識の低い人が結構目立ちます。
- HIVについて私達若い世代にはあまり危機感がないように思う。友人のセックスについて病気は大丈夫かと心配したら「脅そうとしてるのか」と軽くあしらわれたことがあり、意識のギャップにショックを受けた。
- AIDS啓発に関わっている友人も、ポジティブの友人もいるが、頭では分かっている自分には関係ない、という感じが拭えない。

考察

本調査のテーマのひとつであるHIV予防に関連して、様々な具体的な提案や要望、感想などが寄せられました。まず、「HIV＝ゲイの病気」と誤解されることへの反発がありました。しかしもちろん自分たちにも関連する病気として認識し、性的指向を明らかにしても安全な、また性的指向に則した具体的な情報を得られる、検査・相談・治療環境の整備を求める声が多数寄せられました。その一方で、①セーフーセックスを実践しようとしても、相手の非協力や周囲の認識の乏しさ、意識の相違などから実践しにくいこと、②現実に身近にHIV感染した人がいてもなお、自分にも関わりのあることだと実感できない場合もあること、③予防を二の次にした性行動をとる周囲の人々に対して懸念、不安、怒りを感じている人もいることなどから、ゲイ・バイセクシュアル男性の中でもHIV予防への意識やスタンスの差がかなりあるものと思われます。危機意識や予防への動機づけを持つ人が、それをセックスの相手や友人に伝えようとしてもなかなか容易ではなく、逆に孤立してしまう可能性すらあるようです。

ゲイ・バイセクシュアル男性への予防介入においては、当事者だからこそ果たせる役割が多々あり、当事者団体やグループがそれを活かした活動をしています。しかし保健・医療・福祉などの分野における当事者性のない専門職が関わることには、当事者同士のピアプレッシャーやコミュニティ内の性規範に影響を受けずに、中立的な立場からの介入や支援ができるという利点があります。「直接的介入はコミュニティに一任すれば良い」としてしまわずに、非当事者だからこそ可能な直接介入の方法をも検討・開発していく必要があるのではないのでしょうか。

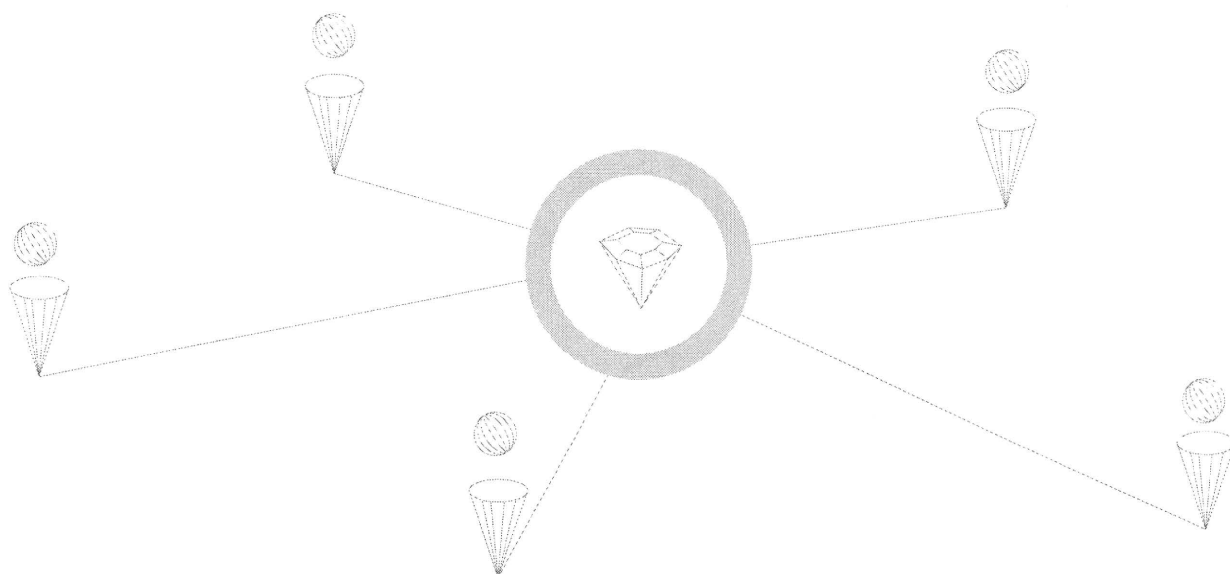
○ 心理・社会的要因と性行動

- 恋人がいても、世間での「異性愛的な会話」に押しつぶされそうになる時、時々誰とでもかまわないからセックスしたくなる時はある。
- ゲイの社会ではさまざまなストレス要因があることで、つきあっているにも性欲に走ったり、性病の知識があるなしにかかわらず感染する恐れのあるセックスをする人が多かたりするから、必然的に性病の感染者が多くなるのだと思う。
- ゲイの場合は、ほかに行き場がないからハッテン場で性欲を解消することになるので、病気が流行りやすいのだと思う。
- ゲイであることのストレスを解消するために、多くの人とのセックスに走ったり、予防の知識があっても感染する可能性のあるセックスを求める人がいるのではないかと思う。
- 男女間よりも同性間でHIV感染が広がっているのは、男女のように結婚が認められていないために、付き合うことに社会的な責任が伴いにくいからではないか。
- 日常何らかのストレスを抱えながら、「ここが自分たちの生きる場だ」と勘違いし、ゲイの世界でしか生きがいが感じられなかったりセックスが過剰になり歯止めがきかないほどになって病気も怖がらなくなってしまい予防も何もなくなってしまうのだと思う。
- 現代社会ではゲイの存在の認知が低すぎ、悩んでいる人が駆け込める場が見つけれられない。誰にも言えない悩みを発散するように発展場に流れるのです。
- もっと自分の性的傾向を気軽に話せる社会になってほしい。そうすれば、性感染症予防についても、もっと気軽に話し合えるのではないか。
- オーラルセックスにもコンドームを使えということは、そのような行為をするなどと言っているに等しく、アイデンティティを否定されているように感じて実行できない。生活のあらゆる場面で自分を殺して生きている、抑圧されていると感じることが多く、唯一そのようなところでしか自分を解放させることができず、感染の危険に目を伏せてもそう行動してしまう。同性愛者がもっとのびのび暮らせる社会になれば、感染症への気遣いもできる余裕が生まれると思う。

考察

これらの記述は、ゲイ・バイセクシュアル男性が置かれた社会的状況や、その中にある心理的状況が性行動へ駆り立てる要因になっていることを、「自分」や「自分たちゲイやバイセクシュアル」の体験や内面の洞察を通して述べたものです。他の項目の記述内容からも窺い知ることができますが、異性愛社会の中でゲイ・バイセクシュアル男性として生きることの絶え間ないストレス、居場所のなさ、「押しつぶされ」「自分を殺す」感覚と、その反動のようにゲイの世界での「発散、解消、解放」のためのセックスに「走り、流れ、歯止めがきかなくなる」現象があることを、彼らは伝えようとしています。おそらくそのような時は、自分や相手の健康を守ろうとする気遣いは失われ、「どうなってもいい」というような気持ちで、耐えていた感情を解き放つための、あるいは寂しさや空虚感を埋めるためのセックスになっているのではないのでしょうか。HIV感染の可能性を知り、コンドームの予防効果を知り、コンドームがすぐ側にあったとしても、「使う」という行動を取るところまで自分をコントロールできない瞬間があることが、これらの記述から推察できます。

環境から受ける否定的なプレッシャーが大きければ大きいほど、またそれに対処する自我の力が育っていなかったり、とても弱っている状態であればあるほど、たとえそれが健康を害する可能性を伴うものであっても何かの行動によって内面のモヤモヤを晴らそうとする機制が人間にはあります。上記の研究参加者らのように自分の内面の状態と、表に現れる行動のつながりに関して気がついて、かつ言語化できる人ばかりではないでしょう。自分が受けているストレスの強さや、自分が抑えこんでいる感情に気づかずに、やみくもにセックスに駆り立てられている人たちもいるのではないのでしょうか。



○ 依存傾向

- 病気は怖いですが、でもセックスもしたい。発展場でのセックスは後悔するだけ。でもしたい。
- セックスは楽しい。しかし、したいからする、のではなく、性的欲求もあるが、それよりも自分が止められないところに問題がある。多くの人がそうではないかと思う。
- すぐにエッチしたいって思ってしまう。どうしたら抑えられますか？病気とか怖いからやめたいのだけど、やめられません。

考察

性衝動のコントロールの効かなさと、それに対する自分自身の困惑や危機感を述べる人がいました。強い性衝動とそれをコントロールしたい気持ちとのせめぎ合いに翻弄され、結果的に性衝動を行動化してしまったことへの後悔や無力感、感染不安などに苛まれる辛さが伝わってきます。性行動の活発な人の中でも、「セックスにおける個人のライフスタイルや特性だ」と言える場合もあると思われませんが、上記のような「自分が止められない」場合は、セックスに対する依存傾向を生じている可能性があります。アルコールなどへの依存と同様、自分の意志の力だけでコントロールを取り戻すことがとても難しく、程度によっては何らかの専門的治療や援助を要するものです。

性行動の問題については、誤解や批判を受けることへの恐れから、他者に対してSOSを特に発しにくいのではないかと思います。しかし、本調査がゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスとHIV感染予防をテーマにしたものであったことから、上記の研究参加者は自分自身の戸惑いを率直に述べることができたのかも知れません。誰にも言えないけれど実は同じような依存傾向に苦しんでいる、あるいは「もうどうにもならない」と思っている人もいるでしょう。性衝動を統御できない苦しさは、咎められるべきことではなくSOSを発すべきことなのだ、というメッセージを彼らに対して発信することや、必要であれば精神科治療や心理カウンセリングその他の援助が得られるような機会やルートを作っていくことが必要ではないでしょうか。

○ カウンセリングや医療機関

- 自分がゲイだということを、ゲイじゃない専門家に話してみたいと思っている。
- カウンセリングを受けたいと思うことがあるが、秘密を厳守してもらえるのかが信じきれず踏み出せない。
- カウンセリングを受けているが、相手がセクシュアリティを理解できるカウンセラーかどうか、非常に重要だと思う。
- カウンセリングを過去に受けたことがあるが、「結婚すれば落ち着きますよ」など同性愛に対する理解がない発言をされて、傷ついた。
- ゲイであることを話さずに精神科にかかってカウンセリングも受けているが、話して拒絶されないかとても心配だし、話さないでいるのも隠し事をしているようで辛い。
- 心の警戒を解かない限り本当の問題について語れないのに、「自分が同性を好きだと言えば、気持ち悪いと思われるのではないか」と心配になり、カウンセラーに対し正直になることができない。またカウンセラーが不注意に嫌悪感を見せれば、こちらは死ぬほど苦しいところにさらに鞭打たれることになる。カウンセリングには興味があるが、ゲイの気持ちはゲイにしかわからないとも思う。
- セクシュアリティについても話し合えるカウンセラーと出会えて、精神的にとても落ち着いた。
- 自分はHIV陽性者だが、病院でカウンセラーと話せることが支えになっている。悩みを言葉に出して試みるのが大事なんだと思う。
- ゲイを十分に理解してくれる心理カウンセラーに会いたい。軽蔑されることに怯えている。
- 色々悩みがあっても、まず「ゲイである」という部分で躊躇してしまうので、ゲイに理解のある信頼できるカウンセラー/医療機関があれば行きたい。
- 医療機関でプライバシーが守られるかどうかかわからないので、セクシュアリティをオープンにして受診できない。ゲイも安心して受診できる病院が必要だと思う。
- 性的指向を隠しながらの医療受診は、精神的なストレス・苦痛が多いと思う。
- 自分の性に対しての問題がごまかしきれなくなってきており、機会があればカウンセリングを受けたいが、自分には壁が高すぎる。自分のことを全て話せる場所が人間には必要だ。
- カウンセラーに性のことを相談したいとは思わない。性に対する意見は人それぞれで、解決できるわけではない。
- 悩みの原因や背景に「ゲイであること」が含まれている時にそれを全部説明しにくく、かといってそれをきちんと話さないと、その結果としての現在の状況をわかってもらえないのではないかと不安になる。

- 心理カウンセラーはクライアントにあえて示唆を与えないようにしているのか? 洗いざらい話すことでスッキリすることはあるが、それなら友人に話すのでもあまり変わらないと思ってしまう。
- ゲイの人が相談できるカウンセリングの場を全国に作ってほしい。
- 同性愛者のメンタルケアを安心して託せる医師のいる機関がわかるサイトがあるといい。

考察

性や性的指向の問題に限らず、何らかの悩みでカウンセリングや精神科受診への関心があったり、必要性を感じている研究参加者にとって、実際のメンタルヘルスの専門家へのアクセスには高い壁があるようです。ひとつの壁は、医師やカウンセラーが、ゲイ・バイセクシュアルという性的指向をどう考えているか、自分が明かした時にどう反応されるかがわからないという不安です。そのために、①悩みの原因や背景に性的指向のことがあっても、それをそのまま言い辛い、言えなければ悩みをちゃんとわかってもらえないように感じる、②問題が性的指向とは直接関係ないことでも、性的指向を伝えないままで相談することは、自分自身を隠している、すなわち本来なら安心して内面を開示したい相手に対してもありのままの自分でいられない状態での相談になってしまう、③援助や治療を求めた相手に偏見や無理解によって更に傷つけられることが恐い、といったことが躊躇の原因になっていることがわかりました。

もうひとつの壁は、秘密やプライバシーがきちんと守られるかどうかの不安です。ゲイ・バイセクシュアルの人に限らず、カウンセリングや精神科治療を受けるすべての人にとって、守秘義務への信頼がおけるかどうかは大切なポイントですが、そこがどうしても信じきれないために近づけないという研究参加者もいました。それほど、性的指向を含めた自分を開示することは(例え相手が専門家であっても)、彼らに強い不安を引き起こすのでしょ。

その他には、「ゲイのことはゲイでなければわからない」「性は人それぞれだからカウンセラーに話しても仕方がない」との意見や、心理カウンセリングの意義への疑問もありました。これらを総合すると、彼らは、カウンセラーや精神科医に内面の問題を打ち明けたり相談したりする際に、ゲイ・バイセクシュアルであることも含めたありのままの自分として向き合いたいが、「それができるような安全な場・安心できる相手・信頼に足る専門性なのか」「自分の悩みや苦しみを本当にちゃんとわかってもらえるのか」という不安や懸念がとて強いと言えるでしょう。その不安が解決または軽減されるならば、専門家(同じゲイ・バイセクシュアルでなくても)の援助を求めたいと思っている人は少なくないと思われます。

○まとめ

一般にマイノリティグループに属する人は社会的なプレッシャーの中で生きています。ゲイ・バイセクシュアル男性も、異性愛者が中心の社会の中で生きていく上では様々な心理的葛藤を抱えていることは、調査実施にあたっての仮説のひとつでした。

今回の調査は、インターネットによる匿名質問票による調査という手法を採りましたが、その匿名性や利便性も手伝ってか、自由記述欄には多数かつ多様な声が寄せられました。その中には、ゲイ・バイセクシュアル男性としての自己を肯定できない苦悩や、この自己否定感の強さのあまり生きていくことにすら困難を感じていることを、一気に吐き出すような内容のものも多く見受けられました。

その一方、自らの性的指向を肯定し、社会的プレッシャーに屈することなく生きていこうとするゲイ・バイセクシュアル男性からの意見も多く寄せられました。本調査への協力によって自分の属するコミュニティに貢献できることを喜んだり、回答のプロセス自体に自分を見つめ直すという意義を積極的に見出したりといった様子が、私たちに伝わってきました。また逆に、ゲイ・バイセクシュアル男性のグループが心理的問題を抱えていたり、特殊性行動に走っているという決めつけのもとに調査を実施したのではないかという疑問も多数寄せられました。

このように、自らの性的指向との折り合いのつけ方の程度と、それによる本調査への反応には、大きな個人差が見られます。しかしながら、多くの回答者に共通していたのは、異性愛者中心の社会でゲイ・バイセクシュアル男性として生きることから感じるストレス、すなわち性の多様性に関わっていない異性愛者への憤りや落胆の表明でした。そして中には、このようなストレスのために彼らの性衝動が高まったり、HIV感染予防行動の阻害につながったりしているのではないかといった意見も寄せられていました。

こうした自由記述の全体像を振り返ってみると、各個人の状況と抱える問題によって、反応も個別に大きく異なるということがわかります。このことは、ゲイ・バイセクシュアル男性を一括りのグループとしてその心情や行動を論じることの困難さ、ひいてはHIVの感染予防行動に関する介入についても、単一の方法論ではいけないということを示唆しているのだと考えます。また、メンタルヘルスやセックス、HIV感染の話題は普段はタブー視されがちな上に、個人のごくプライベートな部分に触れることであるだけに、介入の対象者に様々な感情的反応を喚起しうるデリケートなテーマです。介入することが傷つきや不快を残す体験にならないよう、その時々への反応への感受性と配慮が必要だといえるでしょう。

しかしながら、今回の自由記述に寄せられた研究参加者の声には、今後の介入や彼らへの援助に関して、たくさんのヒントがありました。彼らは、異性愛者が変化することを願うだけでなく、周囲のゲイ・バイセクシュアル男性や自分自身もが変化し、精神的にも性的にもより十全に生きていけるようになることを望んでいます。そしてそのための支援者として、私たちを含む研究者や、保健・医療・福祉・教育の分野に携わる対人援助職に寄せられている期待は、非常に大きいのです。

本研究がゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスの向上およびHIV感染予防行動対策の一助となることを、研究実施者一同願ってやみません。

○ 提言

本調査の結果をもとに、ゲイ・バイセクシュアル男性が対人援助職の方々に求めていると思われる事項の中で、特に共通すると考えられる点を下記のようにまとめました。

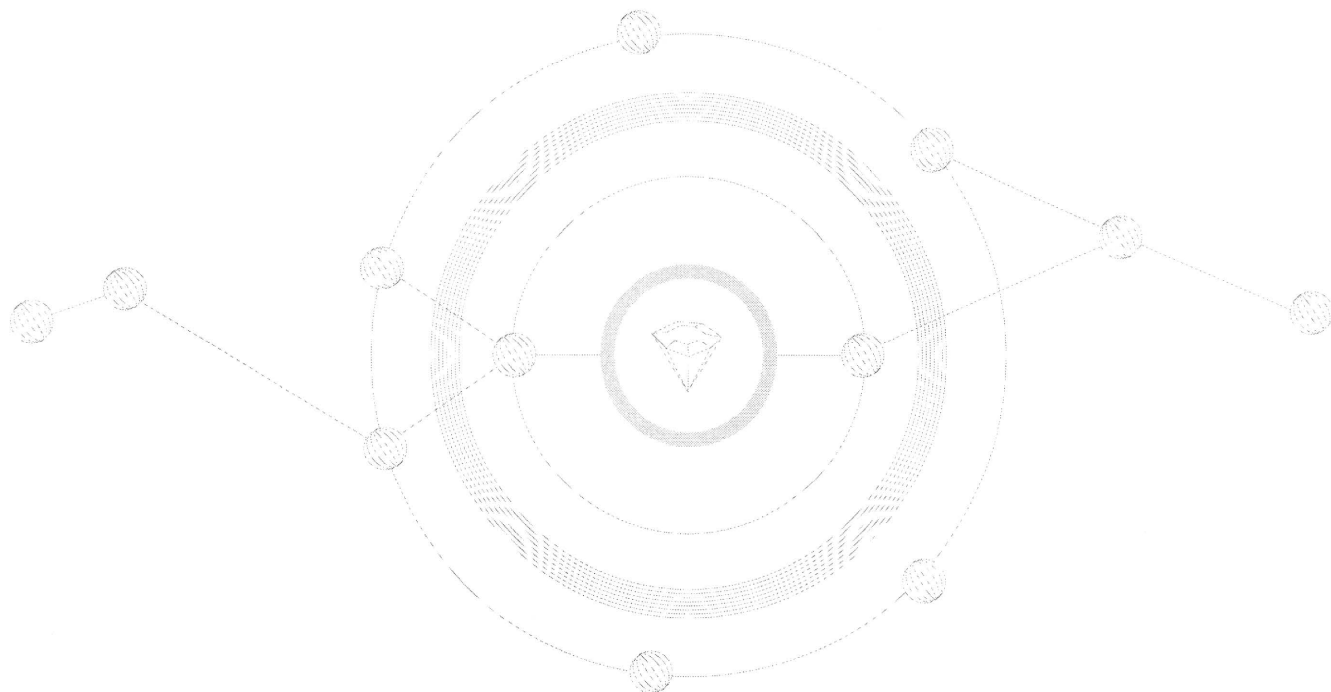
対人援助職（保健・医療・福祉・教育領域）の方々へ

ゲイ・バイセクシュアル男性は、ステレオタイプな見方で一括りに対応されるのではなく、ひとりひとりをニュートラルにありのままに理解されることを望んでいます。彼らは、対人援助のさまざまな仕事に就いている方々に対して、性の多様性を理解した上で、個々に異なる人間を援助しようとする姿勢を求めています。性的指向を明らかにしても拒絶せず、また性の多様性への理解を促進する医療・保健・福祉・教育領域の専門職が、必要とされていると言えるでしょう。

メンタルヘルスの専門家（精神科医・臨床心理士・カウンセラーなど）の方々へ

メンタルヘルスに関して援助や治療を必要としているゲイ・バイセクシュアル男性の中には、性的指向を明らかにした際にどう反応されるか、秘密保持を信頼できるか、などの不安から専門家にアクセスできずにいる人が少なくありません。精神科医・臨床心理士・カウンセラーには、アクセスすること自体を、またアクセスしたあとも性的指向について自己開示することをためらう彼ら特有の恐れを理解し、クライアントがゲイ・バイセクシュアル男性とはわからなくても性的指向について中立的な姿勢を保つなど、信頼関係を構築できるような支援環境を提供することが求められています。

また、ゲイ・バイセクシュアル男性との臨床実践を通して得られた知見を、同じメンタルヘルスの専門家に対して提供することや、大学や専門学校において保健・医療・福祉・教育領域の専門職養成に携わる際に、性の多様性に関する教育を行うなどの努力は彼らへの支援の輪を広げる上で重要であると考えられます。



予防行動への介入を考えている方々へ

ゲイ・バイセクシュアル男性の性的指向・予防行動に関する考えや行動のレベルには、相当個人差があります。また、メンタルヘルスの観点からHIV予防行動について検討する必要性が当事者から示唆されています。従って、性的指向に対する肯定度や予防行動、そしてメンタルヘルスの状況にも十分配慮し、個別性に基じた多層的な予防介入が求められていると言えるでしょう。予防行動の心理・社会的要因についてゲイ・バイセクシュアル男性自身の洞察を促すような試みも、重要な働きかけの1つでしょう。

ゲイコミュニティに所属する当事者だからこそできる介入もあれば、逆に何らかの専門性を有した非当事者であるからこそ可能な介入もあると考えられます。非当事者による介入において対象となるゲイ・バイセクシュアル男性たちとの間で信頼関係を築くには、まず彼らのライフスタイルや置かれている状況の全体像を、偏りなくニュートラルに理解しようという姿勢が不可欠です。その上で、相手がゲイ・バイセクシュアル男性だからといって構えることなく、積極的に専門職としての技術や知識を彼らに提供することが求められています。その際には、当事者であるゲイ・バイセクシュアル男性自身が持っている問題意識や、「自分たちも変わりたい、変えたい」という動機づけや主体性を尊重し、活かすことも大切です。

ただし、メンタルヘルスやセックス、HIV感染という話題は、一般的にはタブー視されがちな上に、個人のごくプライベートな部分に触れることであるだけに、介入の対象者に様々な感情的反応を喚起する可能性があります。介入することが対象者に傷つきや不快を残す体験にならないよう、その時々への反応への感受性と配慮が必要だと言えるでしょう。

調査研究をする方々へ

ゲイ・バイセクシュアル男性などの「男性とセックスをする男性 (MSM)」を、HIV感染の「ハイリスクグループ」と位置付けた調査研究を安易に実施することは、対象の個別性を見失ってしまう危険性と、彼らに付与された社会的スティグマを強化する危険性があります。そのため、介入の前提となる客観的な事実や、介入の意図をきちんと説明することが重要です。

また、性行動やメンタルヘルスについて調査することが、対象者側には侵襲的と感じられる危険性にも注意しないと、対象を意図せずして傷つけたり、信頼関係を築けなくしてしまうことにもつながりかねません。

調査研究結果については、できる限りゲイコミュニティや研究参加者に対してフィードバックすること、そしてその結果をもとに彼らの利益につながるような提言や介入を行っていくことが求められています。

彼らは、興味本位ではなく学術的で真摯な関心のもとに、彼らに対する理解を深めようとする調査研究には、積極的に協力する姿勢を持っています。

●引用について●

本報告書の内容を無断で転載・転用・引用することを禁止します。

この報告書にまとめられている内容は、ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスやHIV予防対策に役立てるといふ、本研究の目的と趣旨に賛同した研究参加者の率直な回答から得られた、貴重なデータに基づいています。そのため、この趣旨以外の目的でこれらのデータが利用されることは、研究参加者にとっても、私たち研究実施者にとっても大変不本意なことです。本報告書の内容を無断で転載・転用・引用することはお控え下さい。この報告書がゲイ・バイセクシュアル男性への理解の促進と、差別や偏見の解消に少しでも寄与するとともに、今後のHIV感染予防対策のために活用されることを、研究実施者一同、心から願っています。引用等に当たっては下記発行者までお問い合わせください。

本報告書に掲載された論文および図表には著作権が発生しております。
複写等の利用に当たっては発行者までご連絡ください。

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業

ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート3

厚生労働省エイズ対策研究事業

「インターネット利用層への行動科学的HIV予防介入とモニタリングに関する研究」成果報告

発行日 平成22年11月30日

発行者 日高 庸晴(宝塚大学看護学部)

URL : <http://www.gay-report.jp/> E-mail : y-hidaka@takara-univ.ac.jp

事務局 厚生労働省エイズ対策研究事業

「インターネット利用層への行動科学的HIV予防介入とモニタリングに関する研究」

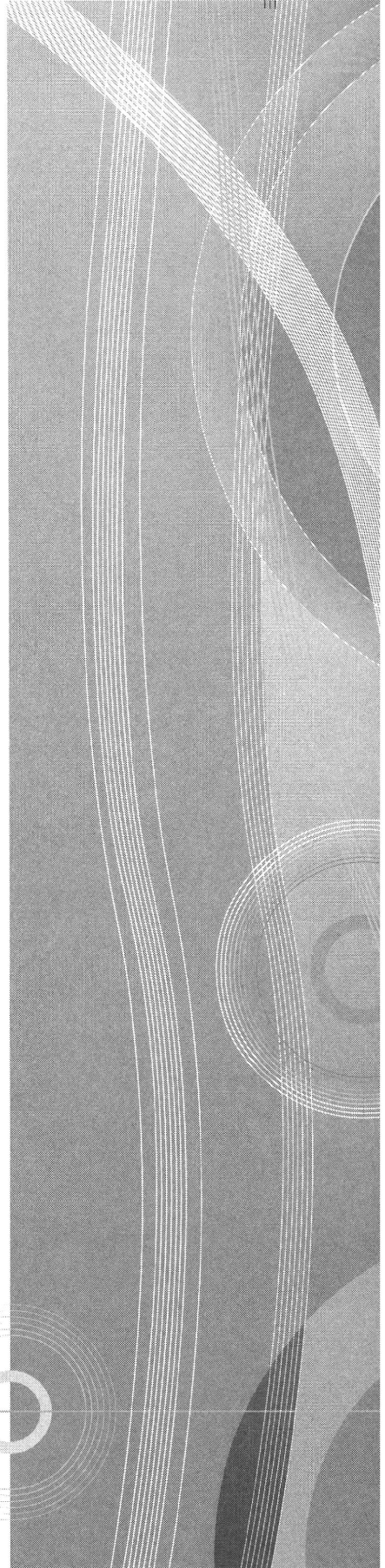
〒530-0012 大阪市北区芝田1-13-16 宝塚大学大阪梅田キャンパス 日高研究室

Tel : 06-6376-0853 Fax : 06-6373-4829

デザイン 株式会社マイ・ビジネスサービス URL : <http://www.mbs2000.com/>

本報告書は研究成果報告のために、財団法人エイズ予防財団平成22年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業・研究成果等普及啓発事業によって作成されました。

<http://www.gay-report.jp/>



厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
インターネット利用層への行動科学的 HIV 予防介入とモニタリングに関する研究
平成 22 年度 総括・分担研究報告書

発行日 平成 23 年 3 月 31 日
発行者 研究代表者 日高 庸晴 (宝塚大学看護学部)
発行所 研究班事務局
〒530-0012 大阪府大阪市北区芝田 1-13-16
宝塚大学大阪梅田キャンパス 日高研究室
TEL: 06-6376-0853 E-mail: y-hidaka@takara.ac.jp

本報告書に記載された論文および図表・データには著作権が発生しております。
複写等の利用にはご留意ください。

